

井上靖

敦煌
天平の夢

天平の夢
敦煌

井上靖

新潮社版

天平の薨・敦煌

〈井上靖小説全集15〉



昭和47年10月20日発行

昭和54年5月30日6刷

定価 1200円

© Yasushi Inoue, 1972,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一電
話・業務部(〇三)二六六一
五一・一、編集部(〇三)二六
六一・五四・一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

天平の蔓

五

敦煌

一〇五

楼蘭

二四四

漆胡樽

二七六

澄賢房覚書

二九四

玉碗記

三三五

天目山の雲

三四三

異域の人

三五九

漂流

三七二

信松尼記

三九二

僧行賀の涙

四二〇

註解

四三五

自作解題

四五二

装
画
加
山
叉
造

井上靖小説全集 第15卷

天平てんぴようの覺いらか

一 章

朝廷で第九次遣唐使てんたうし發遣はつせんのことが議せられたのは聖武天皇かうむてんかうの天平四年で、その年の八月十七日に、從四位上多治比たじひ廣成かうせいが大使に、從五位下中臣名代なかつくみなしろが副使に任命され、そのほか大使、副使と共に遣唐使の四官と称ばれている判官、録事が選出された。判官は秦朝しんてう元げん以下四名、録事も四名である。そして翌九月には近江おみ、丹波たんぱ、播磨はりま、安芸あきの四カ国に使節が派せられ、それぞれ一艘ずつの大船の建造が命じられた。

大使多治比廣成は文武朝の左大臣嶋の第五子で、兄のあな守もりは養老年間に遣唐押使てんたうおししとして渡唐している。廣成は下野守しもつけのし、迎新羅使の左副將軍、越前守等を歴任して、こんど新たに渡唐大使の大任を帯びたわけであった。副使の中臣名

代は鎌足の弟垂目たるめの孫で、島麻呂しままろの子である。

この年のうちに、遣唐使の主要人員は決定され、正式の任命をみた。知乗船事ちせうせんじ、訳語やくご、主神しゅしん、医師いし、陰陽師いんやうし、画師えし、新羅訳語しんらやくご、奄美訳語あまみやくご、卜部うらべ等の隨員を初めとして、都匠とじやう、船工せんこう、鍛工かじ、水手長みずうぢやう、音声長おんじやうぢやう、音声生おんせい、雜使ざし、玉生ぎよせい、鑄生ちゆうせい、細工生さいこうせい、船匠等の規定の乗組員から水手、射手の下級船員まで総員五百八十余名。

ただこの遣唐使派遣の最も重要な意味をなす留学生、留学僧しやうがくそうの銓衡せんかうだけは、年内には決まらないで翌年に持ち越された。もともと時の政府が莫大な費用をかけ、多くの人命の危険をも顧みず、遣唐使を派遣するということの目的は、主として宗教的、文化的なものであつて、政治的意図というものは、若しあつたとしても問題にするに足らない微少なものであつた。大陸や朝鮮半島の諸国の變遷興亡は、その時々ときに於て、いろいろな形でこの小さい島国をも揺すぶつて來ていたが、それよりこの時期の日本が自らに課していた最も大きい問題は、近代国家成立への急ぎであつた。中大兄皇子なかつくみみこに依つて律令国家としての第一歩を踏み出してからまだ九十年、仏教が傳來してから百八十年、政治も文化も強く大陸の影響を受けてはいたが、何もかもまだ混沌こんとんとして固まつてはいず、やっと外枠が出来ただけの状態けいざいで、先進国唐から吸収しなければならぬものは多かつた。人

間の成長で言えば少年から青年への移行期であり、季節で言えばどこかに微かに春の近い気配は漂っているが、まだまだ大気の冷たい三月の初めといったところであろうか。

平城京はその経営に着手されてから二十三年、唐都長安を模したという南北各九条、東西各四坊の整然たる街衢は一応完成はしていたが、都の周辺には夥しい流民が屯ろし、興福寺、大安寺、元興寺、薬師寺、葛城寺、紀寺を初めとして四十余寺が建立されていたが、壮大な伽藍には空疎なものが漂い、経堂の中の經典の数も少かった。

年が改まると、全国から選ばれた精進深斎の僧侶九人がこんどの渡唐の成功を祈るために、香椎宮、宗像神社、阿蘇神社、国分寺、神宮寺等に送られ、五畿七道に於ては海神の怒りを和らげるための海竜王経が誦誦され、伊勢神宮を初めとする畿内七道諸社には奉幣使が派遣された。

大安寺の僧普照、興福寺の僧栄叡とに、思いがけず留学僧として渡唐する話を持ち出されたのは、二月の初めであった。二人は突然、当時仏教界で最も勢力を持っていたと言われていた元興寺の僧隆尊の許に呼び出されて、渡唐する意志の有無を訊ねられた。普照も栄叡も、隆尊と親しく言葉を交えたのはこの時が初めてであった。二人とも隆尊の華嚴の講義を聞いたことはあったが、平生は傍へも近寄れぬ相手であった。

栄叡は体が大柄で、いつも固い感じのごつごつした体を少し折り曲げて猫背にしており、顔には不精麤を生やしていることが多く、一見すると四十歳近くに見えたが、まだ三十歳を過ぎたばかりであった。普照の方は栄叡よりずっと小柄で、貧弱な体を持ち、年齢も二つ程若かった。

栄叡は隆尊の話の聞くと、直ぐ、よし行つてやるというた不遜とても解されそうな態度で応諾したが、普照の方は返事をするまでに多少時間がかかった。普照は隆尊の顔を覗き込むようにして、一体唐へ渡つて何を学んだらいいのかと訊ねた。普照らしい質問であった。何も生命を賭けてまでして唐土を踏まなくても、勉強はどこでもできる筈である。自分は今までにそれをして来ている。そのように、普照のひどく冷たい印象を人に与える二つの小さい眼は語っていた。これまで若手の秀才と言え、いつも普照の名が挙げられて来たが、秀才という言葉は普照は軽蔑していた。自分はただ殆ど一日中机から離れないでいるだけだと思った。

二人の全く型の異なつた若い僧侶に、隆尊は持前のおだやかな口調で説明した。日本ではまだ戒律が具わっていない。適当な伝戒の師を請じて、日本に戒律を施行したいと思つている。併し、伝戒の師を招くと一口に言つても、それは何年かの歳月を要する仕事である。招ふなら学徳すぐ

れた人物を招ばなければならぬし、そうした人物に渡日を承諾させることは容易なことではあるまい。併し、次の遣唐使が迎いに行くまでには十五、六年の歳月がある。その間には二人の力でそれが果せるだろう。

普照は伝戒の師を請うるのにそれだけの長い歳月が必要だという隆尊の言葉に驚かされたが、伝戒の師の選択には、それだけこちらにも具わったものができていなければならぬであろうし、またこちらで白羽の矢を立てた人物の招聘を実現するには、人と人との関係も何かとものを言ってくるであろう。そうした立場を作るためにはどうしても十数年の唐土の生活が必要になって来る。そのようなことを隆尊は言っているのであらうと思った。この時、普照が入唐の話承諾する気になったのは、十数年という長期に互る唐土の生活が許されるということであつた。もっと短期の還学僧としての入唐なら、そのために一つしかない生命を賭ける気にはならなかつたが、それほど長期の入唐なら、一か八かの危険を冒して遣唐船に乗り込むことも強ち悪いことではないと思われた。

隆尊の許を辞した二人は、早春の陽が散っている興福寺の境内で語り合った。栄叡はさすがに多少昂奮している様子で、いつもより少し早口に喋つた。彼はこんどのことは知太政官事舎人親王と隆尊とが相談の結果持ち上がった話

に違ひないと見ていた。

課役を免れるために百姓は争つて出家し、流亡していた。ここ何十年間かそうした社会現象を食いとめるために、幾十かの法律が次々に出されてきたが、効果は一向にあがつていなかった。問題は百姓ばかりではなかつた。僧尼の行儀の墮落もまた甚しく、為政者の悩みの種になつていた。僧尼令二十七条という僧尼の身分資格を規定した法令も出ているが、実際にはそんなものは無力であつた。仏教に帰入した者の守るべき規範は何一つ定まつていず、比丘および比丘尼の受けるべき具足戒は三師七証（戒場に参会する十人の師僧）の不足で行われていない。目下のところでは仏徒は自誓受戒するか、三聚淨戒を受ける程度で放埒に流れ次第である。これらの仏徒を取締まるのは、まず唐より傑れた戒師を迎えて、正式の授戒制度を布くことである。人為的な法律は無力であり、仏徒が信奉する釈迦の至上命令を以てこれに臨むほかはなかつた。正しい戒儀を整えることが、現在の日本の仏教界で一番必要なことは誰の眼にも明らかなことであつた。こんどの遣唐使派遣の機に、二人の青年僧を渡唐させようとする舎人親王や隆尊の意図もここにあるわけであつた。

「少くともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの価値はあるようだな」

榮叡は言ったが、普照の方は黙っていた。いつも、自身のことしか彼は頭の中になかった。戒師を招ぶことがどのような意味を持つかということにはあまり興味はなかった。それより十五、六年間に自分が学び得る經典の量の方が遙かに重要な問題であつた。その經典の重さが普照には実際に感じられるような気がした。そしてそのことが普照の冷たい眼を多少いつもとは違った憑かれたようなものにしていった。

榮叡は美濃の人、氏族詳かならず、興福寺に住す。機捷神觀にして論望当り難し、瑜伽唯識を業となす。——渡唐前の榮叡については、『延暦僧錄』に依つて、これだけのことを知るだけである。同じように渡唐前の普照については、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だったとも言われていたという甚だ頼りない一事だけが、われわれに残されている。併し、それでも普照の方は、『続日本紀』に「甲午、授正六位上白猪与呂志女從五位下、入唐學問僧普照之母也」という一条があつて、彼の出生の一端におぼろげながら一つの照明が当てられている。即ち普照の母は白猪氏で、名は与呂志女、天平神護二年（西紀七六六年）二月八日に、正六位上から從五位下を賜っている。白猪氏の祖は百済の王辰爾の甥であり、その一族には外国關係のことに携わつた者が多いことが知られている。

大使広成が拜朝して節刀を受けたのは、閏三月二十六日であつた。節刀は帰国後返還するもので、これを受けることは、準備がここに全く成つて、今や渡唐大使として全權を委任されたということを意味し、それと同時に日和さえよければ待たなして解纜しなければならぬ立場に置かれることでもあつた。

これに先立つて、三月一日に広成は山上憶良を訪ねてゐる。憶良は皆て大宝二年の第七次の遣唐使の一行に少録として参加しており、渡唐の経験者でもあり、広成の兄とも親しかつたので、広成はそんな關係で挨拶に向ひたのであろう。憶良は三月三日広成に長歌と反歌二首を贈つてゐる。

神代より 言ひ伝てけらく そらみつ 大和の国は 皇
神の いづくしき国 言靈の 幸はふ国と 語りつぎ
言ひつがひけり 今の世の 人も悉 目の前に 見たり
知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光る 日の
朝廷 神ながら めでの盛りに 天の下 申し給ひし
家の子と 撰び給ひて 大み言 戴き持ちて もろこし
の 遠き境に 遣され 罷りいませ 海原の 辺にも沖
にも 神づまり うしはきいます 諸の 大み神達 船

のへに みち引きまをし 天地の 大み神達 大和の
 大國魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天がけり 見渡し給
 ひ 事終り 帰らむ日は また更に 大み神達 船のへ
 に み手うち掛けて 墨繩を はへたる如く あちかを
 し 値嘉のさきより 大伴の 御津の浜びに ただ泊に
 み船は泊てむ 恙無く 幸くいまして 早帰りませ

大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早帰り

ませ

難波津にみ船泊てぬと聞え来ば紐解きさけて立ち
 ばしりせむ

反歌のあとの方は、夫の留守を守る広成の室に贈ったものであった。

四月二日早曉、広成等は憶良の歌にある難波津へ向けて、奈良の都を發った。一行の大部分はすでに出航地難波津に集まっていた、この日奈良から發ったものは広成等騎馬の一団三十名ばかりであった。普照、榮叡等もこの一団の中に居た。寺々からは海路平安を祈念する鐘が鳴り響いていて、春ではあったが、桜の蕾はまだ固く、曉の風は真冬の冷たさを持っていた。

道は大和平野を突切つて、真直ぐに北西へ伸びている。

一行は王寺を経て竜田山を越え、この日は国府で泊り、翌日国府を發つて、午少し前に難波の旧都へはいった。ここは九年前の神龜元年から離宮の修営工事が始められ、それが今だに引き続いて行われていて、ところどころに廷臣たちの邸宅が新しく造築されつつあった。春の光が白っぽく幾つかの工事に散っている地帯を抜けると、やがて商舖の立ち並ぶ繁華地区へはいった。一行は幾つかの橋を渡った。そして最後の橋を渡った時、急に潮の香を含んだ風が真向いから吹きつけて来るのを感じた。このあたりから左手の丘の中腹に難波館が見え、この方は建物の朱と青の色が鮮やかだが、続いて新羅館、高麗館、百濟館といった今は名前ばかりの古い建物が見え始め、その丘の尽きる前方には蘆が一面に生い茂った港の一部が望まれた。

間もなく一行は港にはいった。曾て三韓との交通華やかだった当時の殷賑さは偲ぶべくもないが、それでも蘆の間からは、林のように立ち並んでいる何百という帆柱が見えた。港と言っても、ここはもとと何本かの川の河口が一緒になった外海への出口で、潮と真水とがぶつかり合っている広い水域には、夥しい数の大小の島や洲が散らばり、そこに密生している蘆は一見港灣全部を埋めているように見えていた。ここに出入する船は、その蘆の生い茂っている島や洲の間を通るわけだが、船着場の方から見ていると、

蘆の間を滑つて来るものとしか見えな。蘆の間には点々と沢山の澤標（水路標の代）が立っており、その何本かには小さい鳥がとまっていた。その鳥の白さが、今日ここから遠く異境に旅立って行く人々の眼に滲みだした。

船着場には異変が起きていた。切岸にはかなりの距離を措いて四艘の大船が繋かれ、見送人や見物人がその辺りに集まっていた。船着場の入口には縄張りがしてあり、見送りの家族の者だけがその内部へはいることを許されている。縄張りの中だけでも二千人程の人間が居るであろうか。女の多いのが目立っている。老婆も、若い女も、子供もいる。縄張りの外の見物人はもう少し多く、こちらには流人や乞食の姿も混じっている。時折、誦経と祝詞の声がその船着場の混乱と騒擾の中から、急に大きく盛り上がっては聞えて来ていた。

旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天の鶴群。

——という万葉集の巻の九の歌は、この時の遣唐船に一人子を送り込んだ母の歌である。もう一つ巻八に竺朝臣金村がこの日の入唐使に贈った歌が載っている。波の上ゆ見ゆる小島の雲がくりあな息づかし相別れなば。——併し、これは夫を送る妻の歌で、笠金村が知人のために代作してやったものであろう。

大使広成等三十人の、昨朝都を發つて来た一団は、船着

場の一角で公私の見送人たちとの挨拶をすませると、こんどはそれぞれ違った船に乗って旅立つ自分たちだけで互いに水盃をした。

四艘の船は、いずれも長さ十五丈、幅一丈余の大船で、百三、四十人の乗員ならそう窮屈ではなく収容できる大きさをしたが、造った国が違うだけに、少しずつ形が異なっていた。大使広成の乗る第一船は船の中央部が相当に広くなっており、副使中臣名代の乗る第二船はそれに較べるとずつと狭かった。それから船中に設けられてある屋形の恰好もその位置も異なっていた。判官の乗り込む第三、第四の船は、これらの船だけが殆ど舷側をつけるように繋留されてあったが、船尾の形はまるで違っていた。第三船のそれは竜のおとし子宛らに大きく反り曲っていて、第四船よりも一間程高かった。

乗組員の誰にも、自分の乗る船が他よりいいか悪いかは判断できなかった。これはこれらの船の建造を受けた造船使長官にも次官にも判らなかつたし、直接木材を刻んだ近江、丹波、播磨、安芸の四カ国の船大工たちにも見当がつかかなかつた。ただどの船も帆柱だけは船の中央部に付けられてあった。百済船の様式をとつたもので、帆柱が船の中央部より外れたところにある唐の船とは違っていた。日本の船大工たちは漠然と昔から関係の深かつた百済の船

の方に信用を持っていたのであった。

夕方、四艘の大船は潮の満ちて来るのを待つて難波津の波止場を離れた。岸を離れると、見送りの人々の眼には、船はどれもそのまま蘆の間に傾き沈んでしまひはしないかと思われる程重たげに見えた。どの船もそれぞれ百五十人近い人間と、それらの食糧と、滞在費に充てる物資と、衣料、医薬、雜貨の類と、それから唐の朝廷へ獻ずる莫大な貢物とを満載していた。見送人のどよめきは船が岸を離れる時だけで、あとは船着場は寧ろひっそりとした表情を取った。四艘の船が全く港灣を出るには一刻ほどの時間がかった。

四月三日難波津を発航した四船は武庫、大輪田泊、魚住泊、櫻生泊、多麻の浦、神島、韓泊、備後長井浦、安芸風速浦、長門浦、周防国麻里布浦、熊毛浦、豊前分間浦等の内海の港々に、あるいは寄港し、あるいは碇泊して、その月の中頃に筑紫の大津浦に到着した。そしてこの本土に於ける最後の港で、四艘の船は順風を待つために何日かを過ごした。

そして愈々、広成の一行が天津浦を発航して外海へ乗り出したのは、節刀を受けてから約一月経った四月の終りであつた。

天津浦からは唐に渡るには二つの航路があつた。天智天皇の第五次遣唐船まではいつもここから、宅岐対馬に向い、更に南朝鮮の西海岸に沿つて北上し、渤海灣口を横断、山東の萊州が登州のいづれかに上陸して、それから陸路を下して洛陽より長安にはいつていた。併し、これは南朝鮮が日本の勢力範圍にあつて初めてその安全が保証される航路で、新羅が半島を統一してからは、否応なしにほかの航路に依らなければならなくなつていた。第六次以後の三回はいつも天津浦を發つと西航して、宅岐海峡を過ぎ、肥前直嘉島に出て、そこから信風を得て一気に支那海を横断、揚子江を中心とする揚州、蘇州の間のことかへ漂着するという方法が採られていた。勿論広成らの場合もこの航路に依ろうとしていた。

普照と榮叡の乗り込んだ船は、判官秦朝元の第三船であつた。同じこの船にもう二人の留学僧が乗っていた。一人は名を戒融、一人は玄朗と言つた。戒融は一人だけ発航当日に天津浦から乗り込んで来た筑紫の僧侶で、普照と同年代であつたが、大柄な体のどこかに傲慢なものをつけていた。玄朗の方は二つ三つ若かつた。玄朗は紀州の僧で、ここ一年程大安寺に来て居たことだったが、普照も榮叡もこの若い僧にこれまで会つたこともなく、またその名を聞いたこともなかった。容貌も整つていて、どことなく

育ちのよさがその言動の中に感じられた。

船は筑紫の大津浦を出た最初の夜から、特に海上が荒れていたわけではなかったが、外海の大きい波浪に弄ばれて、木の葉のように揺れ動いた。船員を除いた殆ど全部の乗員がみな食物も喉を通らなくなり、ぐったりと死んだように横たわった。そしてそうした状態がその夜から何日も続いた。その中で普照だけは例外だった。初めの二日は人並みに苦しんだが、三日目には頭の痛みも胸のむかつきも取れ、正坐して船のかなり大きい動揺にも平気で身を任せていることができた。併し、他の三人の留学僧たちが、自分の傍で船暈に苦しんでいるのを朝から晩まで見ていることは、普照にとっても気持のいいことではなかった。

中でも栄叡が一番ひどく傷めつけられていた。いつも口を半開きにして、そこから苦しそうな小さい呻き声を吐きづめに吐いていた。栄叡の眉の濃い眼の鋭い顔は、またたく間に憔悴して、正面から眼を当てるのも気の毒な程だった。玄朗の方は死んだようになって、物も言わなければ体も動かさなかった。

ある日、海上に夕闇が漂い始めようとする時刻であったが、普照は、ふいに一番向うの席に横たわっている戒融から声をかけられた。

「何を考えている？」

これが、何となく太々しい面構えと大入道のような感じの風貌を持った同僚からの、面と向って話しかけられた最初の言葉らしい言葉であった。乗船した時、姓名と生国を名乗り合っただけで、あとはお互いにすぐ船暈に取りつかれて、それぞれ孤独な闘いの中に身を置いていたので、言葉を交すような機会もないままに今まで過ぎていた。

普照は、仰向けに身を投げ出して眼玉だけこちらに向いている筑紫出身の僧の方に、

「何も考えていない」

と答えた。普照には初対面の時からこの大入道が、留学僧に選ばれる程の何ものかを持っている人物とは思えなかった。いかにも筑紫あたりの僧侶でも持ちそうな垢ぬけのないものをその風姿に付けているのが感じられた。

「俺は考えとる」

戒融は言った。

「何を考えているのだ」

「人間の苦しみというものは、結局は自分自身しか解らないということだな。そしてそれは自分が自分で処理するか仕方がないものだ、それよりほかにどうすることもできないものだということだな。俺はいま苦しんでいる。俺ばかりではない。栄叡も玄朗もみな苦しんでいる。併し、お前はいま苦しんでいない。運のいいことに苦しみから脱け

出してしまっている」

なんと厭なことを言う奴だろうと、普照は思った。言われた通り普照はいま自分が、きびしく考えれば、誰の苦しみにも同情していいことを思った。気の毒には思っているが、それをどうしようもないし、どうしてやろうという気持ちもなかった。それにしてもそれを指摘されることは愉快なことではなかった。すると、そういう普照の心を見透してでもいるように戒融は語を継いだ。

「氣を悪くするな。俺はただ本当のことを言っただけだ。俺とお前の立場が変わってれば、俺もまたお前と同じだ。人間とはそういうものだ」

そして戒融は、必ずしも普照に見せつけるためではなかったろうが、いきなり腹這いになると、もう一物もはいっていない胃の中から何ものかを吐瀉しようとした。そして、ああ、苦しい、と口に出して言った。

普照は玄朗という年若い僧侶とは、それでも時々口をきくことがあった。大抵船が烈しく揺れ始めた時だった。玄朗は自分の方からいつも口をきった。いかにも何か喋っていることで気を紛らせでもしているかのように、喋り出すと、その口調には一種の訴えともひとり言ともつかない弱弱しいが、併し、妙に熱っぽい調子があった。

「なに、これしき大丈夫だ。もう少しの辛抱だ。これで船

が難破さえしなければ唐土へ着けるのだ。噂にきいている長安の都も、洛陽の都も見られる。そこを歩き、そこで物を考えることができる。大慈恩寺も、安国寺も、西明寺も、この眼で見ることができると言っているのだ。そのどこかの寺で俺は学ぶことになるだろう。知るべきことはいっぱいある。読まなければならぬものも山程ある。何もかもこの眼で見、この耳で聞く。広い唐土の全部から俺は吸収すべきものは吸収してしまおう。もう少しの辛抱だ」

聞いていると、次第にその持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た。併し、確かにその言葉は、誰もが胸の奥に懐いている素朴なものに触れていた。ただそれは他の者の場合、確とは判らないが、何となく口に出すのを憚られるようなものであった。そんな時玄朗の顔は真蒼だった。玄朗の喋るのを、いつも誰も取りあわないうで聞いていた。勝手に喋らせておけといったところがあった。併し、一度だけ戒融が聞きとがめて、そんな玄朗の言葉を遮ったことがあった。

「余り夢みたいなことを言うな。船が無事に着くかどうかはまだ判っていないんだぞ」

止めを刺すような言い方だった。そんな時でも、栄叡の方は聞いているのかいないのか、終始黙って、眼を空間の一点に当てたままで、相変らず大きい息を口から吐き続け

ていた。

一同にとつてまさに地獄の苦しみというべき船暈から、併し、順々に脱け出すことができた。普照は別として、玄朗、戒融、栄叡と年の若い方から二、三日ずつの間隔を置いて解放されて行つた。船暈が収まると、熱っぽい唐土への憧憬を口走っていた玄朗の口は重くなり、一日中黙していることも珍しくなかった。一種説明し難い憂鬱がこの育ちのいい面差を持った青年僧を捉え始めていた。戒融は怠け癖がついたのか、船暈が癒つても寝てばかりいた。栄叡は一日中と言つてもいい程法華經を誦していた。普照はそんな同僚たちを時折横眼で睨みながら、この航海中にあげてしまおうと思つてゐる『四分律行事鈔』の第七巻を片時も膝の上から離さないでいた。

この四人の学問僧の乗っていた第三船は、大使広成の第一船に続いて航行しており、すぐあとには第四船が続いていた。副使中臣名代の第二船は殿りの筈であった。筑紫を出てから二十日ばかりの間は、前を行く第一船も、後の第四船も、かなり遠距離ではあったが、ずっとその船影を認めることが出来た。夜になると互いに何回となく燈火で連絡し合つた。僚船の灯はいつも、お互いの間を埋めてゐる波のためにある規則正しきで明滅して見えた。

二十一日目の夜、海上には深い靄が立ちこめ、そのため

船は航行が困難となり、碇を降ろして一時停止することになった。その夜を最後として、以後第一船も第四船もその船影を認めることができなくなった。この頃から乗員には水三合、糲一合が一日の食糧として配給されることになった。

三十日目ぐらいから海水は濃い藍青色を呈し、油のような粘りを持った大きな波浪がゆつたりと襲つて来ては、船を山から谷へ、谷から山へと運んだ。船は進んでいるのか、後退しているのか、船員以外の者にはちよつと見当がつかなかった。海の色が藍青になってから逆風が吹く日が多くなり、その度に船は碇を降ろし、漂流することを避けて一日でも二日でも順風が来るまで、そこにそうしていた。

四十何日目に初めて烈しい暴風雨に見舞われた。それまでも何回か小さい暴風雨には襲われていたが、その時のような大きいのは初めてであった。暴風雨は午頃始まり翌日の午まで続いた。一時は海水が滝のように船内に落ちて来た。

その暴風雨の夜、普照は闇の中から戒融の声を聞いた。波と風の音の中からその声は聞えて来た。誰へ話しかけたのか、それだけの言葉では判らなかつたが、普照はそれが自分に向けられたものであることを感じた。

「いま、何を考えておる？」